

国立歴史民俗博物館外部評価報告書

～ 歴博の展示について～

2010年3月

国立歴史民俗博物館

緒 言

1981（昭和 56）年、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）は大学共同利用機関として設置された。歴博の最大の特色は、博物館という形態の大学共同利用機関として設置され、学術資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供という一連の機能を有することにある。また近年、博物館という形態を活かした新しい研究スタイル「博物館型研究統合」を提唱することにした。「博物館型研究統合」とは、〈資源〉〈研究〉〈展示〉という三つの要素を有機的に連鎖させ、さらにそれらの要素を国内外の幅広い人々と〈共有・公開〉することによって、博物館という形態を最大限に活かした研究を推進することである。

今回の評価は、博物館という形態の大学共同利用機関として、最もその特性が発揮される展示についてお願い致した。2008 年 3 月にリニューアルされた総合展示第 3 展示室（近世展示）、2009 年度企画展示「縄文はいつから!?—1 万 5 千年前になにがおこったのか—」、さらにくらしの植物苑特別企画「伝統の古典菊」について、展示主旨、展示構成、演示などの展示技法など、幅広い観点から検討して頂いた。特に「博物館型研究統合」の根幹をなす〈資源〉〈研究〉〈展示〉の有機的連鎖が展示のうえで十分に発揮されているかの検証を重点的に評価していただくこととした。

第 3 展示室（近世展示）については「国際社会の中の近世日本」「都市の時代」に代表されるように、新しい研究成果が絵画資料、考古資料など幅広い資料を駆使して展示に構成され、公開された意義を高く評価していただき、「博物館型研究統合」の実践とは何かという問題を改めてこの展示を通して考えることができたとされている。ただ、日本の近代への展開という点では十分ではなく、課題を残していると指摘された。

企画展示「縄文はいつから!?」は、最新の高度な学術成果が十分に発揮された意欲的な展示であり、展示技法の点でも植生環境、縄文人生体復元など、実物とイラストを活用して工夫された展示であると評価された。しかしながら、複数の委員からいただいた、展示をよりわかりやすくするためには展示担当者以外の館内の組織的な補助体制が必要であるという指摘については、今後、あらゆる展示において館のバックアップシステムを検討し、早急に確立していきたい。

「くらしの植物苑」は、単なる植物園ではなく、本館とも連動し、人間の生活と植物との関わりを示している、特色のある展示となっているとされた。

以上、三つの展示を通じて、いくつかの課題を残しながらも歴博が目指す「博物館型研究統合」の実践を明確に検証できると評価していただいた。

いずれにしても、今回の評価を受けて、今後“博物館という形態の大学共同利用機関”の特性を十分に発揮した研究をはじめ各種事業を推進するよう努めてゆく所存である。

あらためて、歴博外部評価委員会の方々に心から御礼を申し上げたい。

2010 年 3 月

国立歴史民俗博物館長 平 川 南

外部評価報告書

～ 歴博の展示について～

歴博外部評価委員会

国立歴史民俗博物館の展示とその評価

「歴博外部評価委員会」はこの2年間（平成20年度及び21年度）、主として歴博が行った展示のうちの主たるものを見学し、評価することに主眼を置いて評価を行うことを決定し、実行してきた。

昨今さまざまな機関や法人で、外部評価がさかんに行われるようになった。しかしそのための委員会メンバーの人選となると、かなり難しい要素を含んでいる。全くの外部の人が評価すべき機関もあれば、外部に身を置きつつ、評価対象機関の業務内容をよく知っている人でないと、評価できない機関や法人もある。前者の場合は、外部の人には機関や法人の内部が見えにくく、そのため評価の信頼性が失われる場合もある。それに比べて後者の場合、同じ土俵に立つことがあることから、対象機関の内容が理解しやすく、評価の妥当性が増す反面、時には厳しすぎる評価も出てくる可能性はあると思われる。

歴博外部評価委員会の委員は、次ページに記されているように、これまでの歴博の研究プロジェクトに参加した経験のある方や、内部の組織・構成をよく知っている方、また博物館などで歴博と同じ問題を共有している方が選ばれており、その点で総合してみた場合、バランスのとれた評価ができたと考えている。

20年度21年度の評価のテーマは「展示」についてであった。その前には歴博の研究活動について評価を行った。研究評価には、委員は大変な労力を費し、評価する側の能力を越えると思える部分もあったが、これまでの永年にわたる研究活動を俯瞰図として見ることができ、外部評価委員にとってはよい経験を積んだと考えている。

この2年間の評価の視点は、「博物館型研究統合」という歴博の方針が、展示にどのように生かされているかを見る点に置かれた。もともと歴博では日本の最先端の学術研究が行われてきた。この蓄積を、一般の人にわかるように、どのように展示として具体化し、視角化するか、これは難題であると同時に、やりがいのある仕事である。20年度に常設展示のうち近世部分が大きくリニューアルされたことを承けて、改めて研究活動の歴史を振り返り、それが新しい展示にどのように表現されているかを基軸に据えて評価するという方針が認められた。

この評価書を公表するにあたって、よい展示の背景には、たゆまぬ研究活動があることを実感したことを述べたい。各委員が外部評価委員として評価をしたことは、逆に自分の専門分野の課題を気付かされる機会ともなった。また評価という責任感の伴う部分以外では、各委員はすなおに展示のすばらしさを楽しんだ、という点も付け加えておきたいと思う。

歴博外部評価委員会

委員長 田 端 泰 子

国立歴史民俗博物館外部評価委員会

委員名簿

(2008.5.1～2010.3.31)

委員長 田端泰子 (京都橘大学長)

副委員長 鳥越皓之 (早稲田大学大学院人間科学研究科長)

木村茂光 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科長)

谷川章雄 (早稲田大学人間科学学術院教授)

馬場悠男 (国立科学博物館人類研究部長)

李成市 (早稲田大学文学学術院教授)

目 次

I. 総合展示第3展示室（近世展示）展示評価

近世展示を見て	田 端 泰 子 …… 9
第3展示室（近世展示）の評価について	木 村 茂 光 …… 12
第3展示室の展示について	谷 川 章 雄 …… 15
第3展示室（近世展示）の評価について	鳥 越 皓 之 …… 18
国立歴史民俗博物館「第三室 江戸時代 新風景リニューアル」評価	馬 場 悠 男 …… 21
第3展示室の評価報告書	李 成 市 …… 24

II. 企画展示・くらしの植物苑展示評価

平成21年度外部評価委員会の評価	田 端 泰 子 …… 29
平成21年度企画展示「縄文はいつから!？」の外部評価	木 村 茂 光 …… 31
企画展示「縄文はいつから!？」・ くらしの植物苑特別企画「伝統の古典菊」の展示について	谷 川 章 雄 …… 34
歴博の展示評価について	田 端 泰 子 …… 37
企画展示「縄文はいつから!？」および「くらしの植物苑」の評価	鳥 越 皓 之 …… 39
国立歴史民俗博物館展示評価	馬 場 悠 男 …… 42
企画展示及び「くらしの植物苑」についての評価書	李 成 市 …… 45

I

総合展示第3展示室（近世展示）

展 示 評 価

2009年3月

近世展示を見て

歴博外部評価委員会

委員長 田 端 泰 子

国立歴史民俗博物館はさまざまな機能をもっている博物館である。主な機能は研究であり、中でも「日本の歴史と文化の研究」であるという。しかしこの歴博が設立された当初は「歴史博物館」として構想され、博物館としての展示や利用が基本的な性格として設定されたようである（『国立歴史民俗博物館 要覧』より）。

その後設立準備委員会において、全国の研究者の共同研究、情報提供を推進するための共同利用機関としての性格の重要性が唱えられ、それが付加されるに至った。こうした歴史をもつ歴博は、法人名が「大学共同利用機関法人」であるように、国公立大学が研究の推進のために歴博を利用することを、歴博の大きな目的にしていることがうかがえる。前掲『要覧』においても、歴博のめざすものは、「博物館という形態の大学共同利用機関」たることであるとされている。この歴博の理念から見ると、歴博は一般の博物館とは性格が大きく異なっていることになる。

大学共同利用機関としての歴博の姿が前面に出て、その成果が上げられれば上げられるほど、歴博設立の原点にあった、歴史民俗博物館としての性格、展示によって、幅広い入館者を迎えて知識の共有をはかり、日本の歴史と文化研究の進展度を国民に示す、という性格は、達成のスピードが鈍ることになる。この点で、他の時代に先駆けて、このたび近世展示室が大幅に模様替えされ、リニューアルされたことの意義は大きい。

この数年間の歴博研究部による日本史研究分野、民俗学分野、考古学分野などの共同研究や個別研究の進展は、目を見張るものがあり、筆者は大変評価している。その成果は単行本や『国立歴史民俗博物館研究報告』で活字化されているので、研究成果の公開という面では、他の研究機関を圧倒する分量が世に出されていると言える。

かたや博物館の展示内容は、企画展示を除いた常設展示において、歴博らしさが反映されにくい嫌いがあった。常設展示に展示される物や資料・史料は一定の共通理解がなされて、評価の定まっているものであるべきであるからであろう。研究論文で取り上げる新出の史料や大胆な新説からは少し遠い位置にある考え方・定説であるべきからであろう。

また、常設展示は総花的であって、新しく掘り起こされた部分にまで目がいきとどかないであろうことも理解できる。

こうした常設展示における諸制約を知りつつ、新しくなった近世展示について、外部評価委員会は総合展示第3展示室を見学し、久留島浩教授の説明を聞き、おおよそ以下の分担に従って、評価の文章を作成することとした。

「国際社会のなかの近世日本」 李成市委員

「都市の時代」 谷川章雄委員

「ひとともののがれ」 鳥越皓之委員

「もの」からみる近世、村からみえる『近代』 木村茂光委員

「絵図・地図にみる近世、寺子屋「れきはく」」 馬場悠男委員

上の分担は外部委員の得意とする部分に基づいてはいるが、もちろんこの分担に拘束されるものではないことも確認している。

それぞれのセクションからの評価は、次ページ以下をお読みいただくとして、最後に田端の私見をひとこと申し添えておきたいと思う。

第3展示室は全体として以前の展示より明るく解放的になっている点はよかったと思う。照明の光度が増したのか、展示物の細かい部分がよくみえるようになった。

近世展示は先述のように、5つのパート（コーナー）からなっているので、それぞれのパートについて、私見を述べてみたい。

（1）国際社会の中の近世日本

まず展示室に入る入り口に、大きな地図が展示されていることが、入館者をひきつける。これまでの近世の展示室に比べて、いかにも異国から近世日本をながめたらこうなるといわんばかりの地図であり、日本人としては反論したくなるような地図であるところが、興味をそそられる。多少の驚きをもって、近世展示室に入ることができるように、工夫されているのだろう。

近年、「鎖国」日本の内実は、従来考えられていたような閉鎖的なものではなかったことが明らかになりつつある。そうした点で新しい研究成果がこうした国際関係の展示に反映されていることがうかがえる。歴博が目指す「博物館型研究統合」という理念が展示に反映されている好例が、第一のパートであると考ええる。

（2）都市の時代

このコーナーの中心は江戸の町の模型であろう。全体として町の情景が把握できると共に、部分部分を拡大して、映像で見ることができるよう工夫されている。詳しく通りの様子や職人の姿、家屋のたたずまいを見たい人の要望に応えられるように配慮されているのがよい。展示の妥当性を認めつつ、要望を付け加えれば、1つには、江戸東京博物館の近世展示すなわち江戸の町に関する詳しい展示と比較したとき、歴博では、どのような点を江戸の町の典型あるいは展示の中心とすべきだと考えているのか、江戸という都市の理念をどう考えているのかについて、一言加えてもらいたいと思う。もう1つは歴博の研究の集積のひとつである歴史系総合誌『歴博』、その151「特集住宅」など新しい研究の成果が出された場合、展示部分をより詳しく知りたい人に対して、このような関連図書、文献があることを、展示解説などで、随時公にしたいと思う。

できる範囲で今後工夫していただきたいと思う。

(3) ひとつのものながれ

このスペースの特徴は、伊能忠敬の地図とその歩幅を床に示したところにある。かつての企画展示の経験を生かして工夫がなされている。物流については、多様な物の流れをいちいちとりあげるのは困難であるので、ここでも北前船に物流を代表させている。船内の状況まで把握できる造りになっている点は大変興味深い。但し細かい点の工夫は、解説を聞いて初めてわかるので、見学者に見所をあらかじめアピールしておくような工夫はできないものかと思う。

(4) 「もの」からみる近世、村からみる『近代』

近世農村の四季を絵図を中心に展示する手法はオーソドックスなものではあるが、視覚に訴える最良の方法であることに変わりはない。これに加えて、模型を造って農村の生活を再現する一助としている点は新しい工夫である。ただこの部分は、将来もっとスペースを広げて民俗研究の成果とドッキングさせて近世農村の姿を豊かに再現することができる部分であると思う。

(5) 絵図・地図にみる近世、寺小屋「れきはく」

寺子屋を展示室の中に造ったのが今回のリニューアルの一つの目玉であったと思う。体験型学習には格好の舞台である。このパートの一部分にぜひ、寺子屋で使われた教科書や手本の模造品を多数置いてもらおうとさらに当時の寺子屋の雰囲気が出るのではないだろうか。

以上、ある意味で無責任な注文をつけさせていただいた。展示によって現段階の研究成果を、見る人に理解しやすい方法で示すという難題を5つのパートで、よく考えられて展示替えに取り組まれたご苦勞を知りつつ、できればという希望のもとでの評価であることを付言しつつ、まとめとしたいと思う。

第3展示室（近世展示）の評価について

木村茂光

1. 展示全体に関する評価

25年振りにリニューアルした展示を見た最初の感想は、近年の近世史研究の成果をみごとに吸収し展示内容に反映させる努力がなされている、という点であった。とくに「国際社会のなかの近世日本」に象徴されるように、どちらかというところ「鎖国」制による閉鎖的で一国史的なそれまでの理解を極力克服しようと努力されていることに対しては心から賞賛を送りたいと思う。

それと同時に、展示ケース前の「小板」の設置、「寺子屋れきはく」に代表される体験を重視した展示など、多くの新しい試みが為されている点は、博物館の展示の内容だけでなく「形」を造り替えていこうとする意気込みが感じられ、好感をもった。

総じて、展示内容といい展示の「形」といい、これからの博物館をリードしていこうとする姿勢が至る所に見られ、質の高いリニューアルができあがった、と評価したいと思う。

全体的な評価はまた別の形で行われるであろうからこれくらいにして、早速、私が担当した「村からみえる『近代』」について感想を述べることにしたい。

2. 「村からみえる『近代』」をみた感想

このコーナーは以下の5つのテーマから構成されている。

- ①「近世の村を読み取ろう」
- ②「知識と技術」
- ③「生活を楽しむ」
- ④「たたかう人びと」
- ⑤「世直し」

そして、この展示構成の意図は、リニューアルにあたって作成されたパンフレットの「一目でわかる第3展示室（近世）」では次のように説明されている。

「村からみえる『近代』」では、村絵図を、空中写真・地形図とあわせて読んでいただき、来観者ご自身に近世の村を想像していただくことからスタートします。この近世の村にくらした人びとについて、働いたり、学んだり、楽しんだり、あるいは自分たちの生活を守って闘ったりする姿勢を描きます。このなかから、近代社会を担う人びとが生まれてくるのです。

実際、①「近世の村を読み取ろう」では、日本の東と西の村の村絵図が紹介され、そ

れを空中写真と地形図を用いた丁寧な解説が施されており、当時の村がどのような構造になっていたのかを具体的に知ることができるよう工夫されている。その裏側には「海付きの村」も紹介されており、農村だけで近世の「村」をイメージしないような工夫がされている点は好感をもった。

③「生活を楽しむ」では「村芝居の世界」が具体的に紹介されており、興味深い展示になっているが、やはりこのコーナーの圧巻は②の「知識と技術」であろう。その小テーマを私のメモに拠って挙げてみると、「蚕を飼う」「俳諧と交流」「村の西洋医学」「和算」「国学」「歴史の発見」「地方文人」など多数に及ぶ。リニューアルを担当したグループの目配りの良さをみごとに反映したテーマ立てになっているといえよう。

「村の西洋医学」のコーナーに展示された人体の内臓模型に象徴されるように、近世社会における「知識と技術」の具体的な内容とその高さを来観者が実感できるような展示内容になっており、努力の跡が偲ばれる。養蚕技術の蓄積と伝播およびその経路、地方文人層の成長と地域史の発見などの様子が、具体的な展示物を通じて身近に理解することができるよう工夫されており、「海付きの村」の向かい側に大きく取り上げられている「農業図絵」の生き生きした描写と相まって、近世の村の豊かなイメージを浮かび上がらせるのに十分成功しているといえよう。

ただ、①～③にかけての豊かな内容と比べると、④「たたかう人びと」・⑤「世直し」の内容の弱さが気になった。近年、この分野の研究があまり進展しなかったことの反映だとも思われるが、③までの明るい？近世社会像と④・⑤の内容、というよりそれへの連続性というかそれらの因果関係がうまく関連づけられていないように思われたがいかがであろうか。素材もそれほど「リニューアル」さを感じられなかった。

このような評価に立つと、①～③の展示内容を前述のように手放しで賞賛できなくなってしまふ。そこで改めて①～③の展示内容をみると、前述のように、村社会内部の具体的な様相に関する説明は詳しいが、村と領主、村に住む百姓と領主との支配・収奪関係に関する展示があまり無いように思う。もちろん、以前の近世像のように、「百姓は死なぬよう生きぬよう支配するのが肝要」というような「困窮」史観に戻せといっているわけではないが、近世社会における主要な矛盾がどのようなものであったのかについてはやはりしっかりとした説明が必要ではないだろうか。

④にもそのような説明文があったように思うが、展示としてそれが明示されていないために、展示内容を追いかけて見ている人にとっては、突如現れる鎌を携えた巨大な百姓像が異様に感じてしまうように思う。実際③「生活を楽しむ」のコーナーを見終えて④の「たたかう人びと」の空間に移った時、私もそのギャップの大きさに違和感を持たざるを得なかったのが正直な感想である。

実は、この点は単に①～③と④・⑤との連続性に関する問題だけではないように思う。それはこのコーナーの大テーマである「村からみえる『近代』」に関わる問題性を孕んでいるように思う。前記のリニューアルのパンフレットに「このなかから、近代社会を

担う人びとが生まれてくるのです」という一文があったが、展示を見ている限り、①～③までの成果一特に③の「知識と技術」の成果のなかから「近代社会を担う人びとが生まれてくる」と理解されやすくなっており、④・⑤の展示にあるような近世社会を担った人びとの苦悩と戦いの上に「近代」が成立する、という理解にまで行き着かない危険性があるように感じられた。

と同時に、②の「知識と技術」の展示内容が突出しているが故に、ここに描かれた知識と技術と近代のそれとの差異性をどのように説明するのか、言い換えれば、「近世」の知識と技術の達成と限界をどのように理解したらよいのか、という不安感をもったのも事実である。その要因を支配・収奪関係に関する展示の弱さだけに求めることはできないが、「近世」という規定性をどのように展示を通じて説明するか、難しい課題が残されたままのように感じた。

もちろん、これらの課題は今回リニューアルした第3展示室（近世展示）だけで解決できるものではなく、今後行われるであろう第6展示室（現代展示）との比較・総合とのなかでしか解決できない内容であるが、今回のリニューアルした展示を見せていただいて、やはり、「日本の近代とはなにか」という日本の歴史にとって古くて新しい命題が依然突きつけられているのだな、というのが率直な感想である。

3. おわりに

「ないものねだり」的な感想ばかりを並べてしまい、評価にはほど遠い内容になってしまったことをリニューアルを担当された方々にお詫びしたい。「1」の全体的な評価でも述べたように、近年の近世史研究の成果を十分取り込み、国際性と都市性を軸にしたこれまでにない近世史像を提示している点では傑出の展示内容であることには間違いない。この点については賞賛しても過ぎることはないであろう。それが故につい突っ込んだ感想になってしまったことをぜひご理解いただきたいと思う。

第3展示室の展示について

谷川章雄

2008年3月にリニューアルされた総合展示第3展示室(近世展示)の展示について、以下に若干のコメントを述べることにする。なお、評者は第3展示室のリニューアルに関して実際に展示計画に参加し、とくに「都市の時代」のコーナーの考古学関係の展示資料の選定やパネルなどの原稿執筆を行なった。ここではそうした立場であったことをあらかじめ断わっておきたい。

(1) 展示理念について

展示理念については、第一期展示以降20数年間に進展した「新しい近世像」を展示するという、基本的な方針は達成されたといえよう。また、対外関係史・都市史・流通史、村落史の研究成果にもとづいた、「国際社会のなかの近世日本」・「都市の時代」・「ひとともののがれ」・「村からみえる『近代』」という4つの大テーマの設定も適切であったと思われる。

この間の近世史研究の進展は、とりわけ対外関係史や都市史、近世考古学の分野においてめざましいものがあったと考えられるが、そうした研究成果の骨格を展示することができた。

一方、環境史や災害史など人間と自然の交渉史をはじめとして、今回の展示でとり上げることのできなかつた重要なテーマが存在することも事実である。展示スペースの制約もあって、近世史に関わる全てのテーマを網羅的に展示することは不可能であり、今後の企画展示・特別展示の機会にフォローしていく必要があるだろう。

国際性に対する配慮については、「国際社会のなかの近世日本」のコーナーにおいて、朝鮮・アイヌ・オランダ・琉球との関係が展示の柱になっていることから明瞭である。ただ、ここでいう国際性をどう解するかによって視点が異なってくることも事実であろう。むしろ、近世日本の国際性とは何かという問いが、展示のなかで立てられる必要があったかもしれない。

また、マイノリティーに対する配慮は、江戸橋広小路の模型に配された身分的周縁論とジェンダーを示した人形などにうかがえるが、必ずしも充分であったとはいえないだろう。

ただし、これも展示スペースの制約を考慮する必要がある。

(2) 展示手法について

第3展示室全体の展示手法は、「新しいコミュニケーションができる展示」「いつ来て

も新しい発見がある展示」という理念の下に、「展示ケース」だけでなく「タッチパネル」「めくり」などを加えることによって、多くの情報と多様な視点を示した点が評価できる。展示を見る人たちが自分の興味や関心にしたがって、自由に情報や視点を掘り下げることができるだろう。

「江戸橋広小路」の縮小模型は、第一期展示から引き継いだものであるが、今回の展示では身分的周縁論とジェンダーを示した人形を配し、手すりのパネルやタッチパネルで解説を加え、万町（日本橋一丁目遺跡）の発掘地点を示すことによって「再生」させることができた。

また、「絵図・地図からみる近世」「『もの』からみる近世」というミニ企画展示コーナーは、常設展示を補完するものとして重要であろう。

寺子屋「れきはく」という体験コーナーは、学校教育との連携を図る上で意義のあるものといえよう。

とくに、「都市の時代」のコーナーに、江戸城、武家屋敷、町屋、墓地の発掘調査の成果が体系的に展示されたのは注目される。こうした近世考古学の世界が常設展示のなかで示されたのは、これまで例のないことであった。近世都市江戸の常設展示を行なっている江戸東京博物館や都心区の博物館では、近世考古学が体系的に展示された例はないのである。

ただし、近世考古学の成果全体から見れば、今回の「都市の時代」の江戸の発掘調査の成果がその一部であることも事実である。たとえば、都市の開発とインフラ、都市史上の変遷と画期、都市空間と地域性などの問題は、近世考古学の成果によって明らかにできるテーマであろう。

とはいえ、展示スペースの制約から、その成果の全てを網羅的に展示することは不可能であり、今後はミニ企画展示コーナーなどの展示の機会にフォローしていくことを期待したい。

（３）博物館型研究統合の視点

展示には近年の研究成果が反映されており、近世史だけでなく近世考古学、芸能史、民俗学、服飾史、絵画史、音楽史など様々な分野の成果による総合的な展示となっている点が評価できる。

展示は、基本的に「もの」を通じて実証的に語る方針が貫かれており、それぞれの資料の特質がうまく組み合わせられていると感じた。

たとえば、今回の考古資料によって明らかにされた世界は、考古資料の有する特質に拠っている。そして、歴史学などの研究成果をもって、遺構・遺物の分析や解釈に援用することも近世考古学の基本的な方法である。つまり、考古資料の特質や考古学の方法論が展示の基礎に存在するといえよう。

したがって、今回のような様々な分野の資料を組み合わせた総合展示は、多様な資料

論・方法論を前提にした総合的な思考が土台となる必要があり、また実際に土台となっているのである。こうした総合的な展示と資料論・方法論の総合化につながる回路を自覚し、それを論理化することによって、研究の総合性を獲得するための道筋が見えてくるのではなかろうか。

逆に言えば、総合的な研究が出発点となって、資料論・方法論の総合化、さらに総合的な展示が可能になるといえよう。

いわゆる「博物館型研究統合」の視点とは何かという問題を、改めて今回の展示を通して考えることができたように思われる。

第3展示室（近世展示）の評価について

鳥越 皓之

全体的評価

江戸時代に視点を定めたこの総合展示第3展示室（近世展示）の展示は、クリアーであり、いくつかの共同研究の成果をも十分に生かして、極めて印象深いすぐれた展示であるというのが、展示室を廻った後の第一印象である。研究の成果から出てきたものをどのように展示をするかという配慮と、入場者にナルホドという感心をしてもらうだけではなくて楽しんでもらえる配慮とが交錯しており、その点も評価すべきことである。「博物館型研究統合」のよい成果が現れているように思う。

展示全体の組成を理屈っぽくいえば、展示物という要素群を体系化して示すというシステムの表示ではなくて、構造・機能的表示になっていることをおもしろく思ったし、それを評価している。どういうことかということ、ここでいう構造とは、比喩的に言えば、建築の柱のようなものであり、機能とは屋根があることで雨露を防ぐという「働き」を意味する。展示リニューアルにあたっての構造（柱）は、キーワード的に言えば、研究成果の反映、国際、生活史、環境史、多様性（マイノリティ）などであろう。そのそれぞれはうまく機能しているが、とりわけ、「国際」部分が印象的で新鮮であった。他方、生活史は博物館にとってはその発想が少し年代を経て、手慣れたものになったからであろうか、ややダルイ印象をもった。環境史については基本的な視点が見えづらかった。

環境史という柱の弱さは、そのバックに思想（表現者の立場）が明瞭ではなかったことによると推察される。そして素朴に人間と自然環境との関係を断片的に示していることになったのではないだろうか。たとえば、エネルギーという視野から環境史を見るということになれば、農村から都市に入ってくる膨大な薪などの燃料——それは農村の山々の所有と利用の厳しいルール化、山々の荒廃、薪を運ぶ馬や船、都市の煙害など、都市と農村をつなぐラインが見え始めるし、都市のあり方が農村の自然の破壊と関わってくるのが分かる。エネルギーは一例だが、なんらかの視点があれば、もう少しストーリーができたように思われる。

私がとくに担当を依頼された「ひとともののがれ」の空間は、他の展示空間に比べて、最近の研究成果との緊張関係がなく、全体がかつたるい印象をもった。その意味でかなり否定的と言わざるを得ない。もちろん、決して恥ずかしくない、ある高さの水準の展示はなされており、小さな子どもたちは船に興味があるようだったし、旅籠にも二階の人物の影など一定程度の工夫がなされており、長所をさがせばそれはある。けれども、なんと言っても展示物と研究との緊張関係という基本のところでの、かつたるさは

つらいものがある。

「村から見える近代」は玄人好みになっている。子どもたちにとっては「異界」でもある村なのに、子どもたちや素人への新鮮な眼差しを与えるチャンネルが弱いように思った。玄人好みの一例では、たとえば（たまたま私の専門上、民俗学に近いところの例を出せば）、「海付きの村の生業空間と生業暦」などは最近の民俗学の生業研究の学問的動向を知らないと、なぜここでこのようなテーマがあがるのかを理解するのがむずかしいであろう。研究の成果を深く生かすためにはある程度玄人好みにならざるを得ないことは理解できるが、まだ工夫の余地があるように思う。この部屋の入り口的な中央に「四季農耕図屏風」を大きな空間をとっておいたのは、この部屋の全体像を理解するうえで極めてよいように思った。

「都市の時代」の「江戸橋広小路」は、その展示物でも説明でも、民俗学から見ても、さまざまな民俗事象がちりばめられており、興味深かった。

展示施設

展示施設における構造(柱)は、入館者の導入に幅のある直線の通路を設定しており、これがいわば大黒柱の役割を果たしていて、全体の枝の柱に人びとを導くときの安定性を付与しているように思われた。また、寺子屋空間は、他空間とは自立した空間に見えるが、その自立性は入館者にとっては息がつける別空間となっており、よい働きを持っていて入館者にも喜ばれている印象をもった。

ただ、入館者に対する導入部の太い直線(通路)は、その後、入場者が任意に横道に行くことによって、自分で選択して展示物を見られる長所があり、それが新しい展示論であることを知っているが、直線であることによって、“ひっかかり”がないためであろうか、かなりの数の入館者が足早に奥に進むことになり、全体を理解する上で大切な「万国総図・人物図」や「近世社会とは」というあたりは無視されることが多いのは残念なことであった。寺子屋「れきはく」は担当者の対応もよく、子どもを中心として親子たちでにぎわっており、ある意味で“博物館らしくない”「行動展示空間」で、よいアイデアの印象をもった。

「ひとともののがれ」は、18世紀後半から新しい長距離物流ネットワークが形成され、国民的市場が形成されることを示そうとしたのであるが、見る側にそれが十分に感知されるかどうかはやや疑問である。「ネットワーク」や「市場」を展示することは至難の技ではあるものの、工夫の成果が滲み出ている感じはあまりしなかった。ここでは道しるべや旅籠や干鯛のにおいなどの“点”の工夫に終始してしまったようである。また、旅籠空間も先に触れたように工夫はみられるものの、展示空間の広さに比して情報量が少ないという課題を背負っているように見えた。さらに、物流では代表的な輸出品・輸出品はモノが置いてあって、その横に説明パネルというややクラシックな展示になっており、他とくらべて少し見劣りがする。よい場所にかかわらず人が集まるという

ことは見られないように思われた。

基本的考え

子どもなどあらゆる年齢の者、また外国人にも等しく鑑賞し楽しんでもらえる展示を志すことは当然であり、その分野に詳しい委員もおられるので、より具体的な指摘があると思うし、それは貴重なことだろう。ただ、私は別に、地域のまちづくりの計画などで助言をしたりしている仕事を通じて、私が最近感じていることとして、先に述べたことと矛盾する側面ももつが、次のようなことを付言しておきたい。それは「博物館型研究統合」というときの、展示と研究との関係を一度斜めから考えてみたいからである。

専門の深さを分かりやすくかみ砕くことは、とつてもよいことだと思うけれども、他方、かみ砕くことによって、その研究の核のようなものがぼやけてしまう欠点をもつことも事実である。多くの人を経験していることだと思うが、幼少時に大人の世界が十分に分からないけれども、また、ある絵画や音楽が分からないけれども、なんか、すごく迫力のあるものがその中に存在していることを“実感する”という経験である。理解できないけれども迫ってくる“実感”というものである。分からないものをすべての子どもに分からせる必要はないのではないか、学問の成果をその核の水準のまま示してもよいのではないかとも思うのである。分かる者は分かり、分からない者は分からなくてよい、という考え方は、博物館学では採用しにくいものであろうから、笑止の沙汰だろうが、私はあえて“実感”（ベンヤミンの言うアウラ＝オーラ）の大切さを言っておきたいのである。とくに本博物館はいわゆる研究博物館であるので、このような側面をも“確信犯”的に示してもよいように、個人的意見としては思う。

国立歴史民俗博物館「第三室 江戸時代 新風景リニューアル」評価

馬 場 悠 男

評価ポイントとして（１）展示理念、（２）展示手法、（３）「博物館型研究統合」の視点が示されているが、（１）と（３）に関してはほかの評価委員から詳しい評価があると思われるので、ここでは一般的感想にとどめさせていただきたい。（２）に関しては多少詳しく述べさせていただく。

展示理念の貫徹に関しては、色々と工夫されていると思うが、やや散漫な印象であり、世界史の中での江戸時代の独自性が、もう少し明確に位置づけられても良いのではないか。また、江戸時代とは何だったのか、現代にどのような影響を与えたのか、というような来館者の素朴な疑問に直結する解説が、分かりやすい形で示されていれば良かったように思われる。あるいは、望みすぎかも知れないが、自然科学的な発想で、環境との関係やエネルギー収支からの統一的分析があれば、私などにとっては興味が倍増する。

「博物館型研究統合」に関しては、部分的には様々な共同研究の成果が現れているように見受けられるが、展示全体を広く見て、高校の日本史教科書には載っていないような新事実や新解釈が明瞭に示されているとは思われなかった。もちろん、個々の事例は新しいものが採用されていて、工夫が見られる。一般論として、そもそも、日本史研究の現状が、10年や20年で新しい発見があつたり、新しい解釈が生まれたりはしないということなのだろうか。もっとも、そのように見えたのは、展示を理解することに関する私の単なる実力不足かも知れない。

展示手法に関しては、全体として良好な印象を持った。やはり、多量の絵画資料が、圧倒的にわかりやすく、訴えるものがある。タイトルに動詞を多用しているのは、観客を誘う感じでよい。それぞれのコーナーの始まりで見方を説明しているのは適切かつ親切である。解説内容としても、定説としてはなく、読み解き方を説明しているのは好ましい。

本をめくる形の解説が多用され、親しみやすく、分かりやすい。良くある電子的手法で検索するシステムを多用していないのが、成功している。ちなみに、国立科学博物館では、私たち研究者はそうしたかったが、上層部の無理解により実現できず、電子的手法に頼りすぎて失敗している。

タイトルが4ヵ国語で表されているのは、最近の展示としては当然だが、英文説明が大

項目のみなのは残念である。個々のパネルでも、1/4くらいは英文の説明を入れてほしい。じつは、国立科学博物館でも、上述の理由で、個々のパネルの英文説明は電子検索をしないと出てこないのので、実際には利用者がほとんどいない。

アイヌの展示が充実しているのは、評価できる。

江戸橋広小路の模型は、人物描写もあって、理解を助け、文句なしに楽しめる。

江戸の様々な発掘の様子が展示されているのは、調査研究の現状が分かり、研究と展示の関連が理解されて、成功している。将軍墓の構造は、NHKの「篤姫」との関連で、一般の人々も興味を持つだろう。私自身も、寛永寺徳川霊園の将軍親族遺体の調査と研究を行っているので、個人的に興味深かった。

「自然へのまなざし」は、一通り解説されているが、「あさがお」以外は、やや突っ込みと迫力に欠ける嫌いがある。当時の出版物やパネル説明以外に、関連する実物をもう少し展示するなど工夫が欲しかった。たとえば、木製歯車は、実際に動かせれば、もっと楽しいだろう。

なお、医学館薬品会の絵の右上に座っているように描かれているのは、解説では人体骨格の標本と書いてあるが、実は精巧に作られた木製の骨格（木骨）であり、奥田万里の指導で1820年頃に製作されたものである。実物は、きわめて保存が良く、骨格だけでなく、腰掛けるように展示できる仕組みも付いていて、収納する箱なども完璧に残っている。実は、私が研究したことがあり、国立科学博物館地球館2階に展示してある。

「解体人形」は大変貴重なものであり、人体の実物を見ないで作成したにしては、個々の器官の形態はお粗末だが、全体的な位置関係と構造を知るためには充分で、教育効果は大きいと判断される。しかし、展示に関しては、若干の注文がある。もっとも、「解体人形」を手にとって調べたわけではないので、間違いがあるかも知れない。

まず、大動静脈と腎臓の部分が展示されていないようで残念である。どこかに収められているのだろうか。また、現在の人体模型と対比されれば、もっと理解が容易だろう。

次に、解説書は不適切な部分が多い。「乳び脈（管）」は現在の解剖学用語では「胸管」であり、そのような追加説明をすることが望ましい。「解体人形の後壁と躯幹部の骨」は「解体人形の後面と四肢骨」と言うべきであろう。「脳梁」は前の部分では「静脈洞」と説明されているように見える。⑤上から「肺臓、脾臓、胃、肝臓、心臓、腎臓、大血管、横隔膜」は順序と表現が不適當のようである。「肺臓、肝臓と胃、脾臓と脾臓、心

臓と大血管、腎臓と大血管、横隔膜」とするのが適当であろう。ほかにも不適切な表現が多くあるが省略する。

いずれにせよ、このような人体模型が地方でも作られていたことは、庶民レベルの教育熱心さを示すもので、きわめて興味深い。

全体としては、今回の展示更新は合格ラインに到達していると言えよう。

以上

第3展示室の評価報告書

李 成 市

はじめに

以下において、総合展示第3展示室（近世展示）の評価に対する私見を述べることにする。その評価の基準は、展示の理念（総合展示のリニューアルへの基本原則「国立歴史民俗博物館総合展示リニューアル基本計画」、以後『計画』とする）がどこまで実現されているかに置くことにする。すなわち、①研究成果の反映、②国際化への対応、③生涯学習等一般公衆の知的受容への対応、の3点である。また、第3展示室は、四つの大きなテーマ（「国際社会のなかの近世日本」「都市の時代」「村から見える『近代』」「ひととものながれ」）から構成されているが、本報告は、「国際社会のなかの近世日本」を中心に検討することにした。

1. 研究成果の反映

基本原則（『計画』）に掲げられているリニューアルに科せられた課題は、「歴史研究の専門機関として、人文・社会科学と自然科学の幅広い学問分野の協業や最新の研究設備により生みだされる質の高い研究成果をタイムリーに国内外に公開できるようにする」となっている。第3展示室は、江戸時代（近世16世紀末～19世紀半ば）を扱うが、今回のリニューアルにおいてもっとも力点が置かれているのは「国際社会のなかの近世日本」である。そのコンセプトは、近世日本を取り巻く国際環境は、鎖国なる言葉に象徴される孤立性ではなく、長崎口、対馬口、薩摩口、松前口の「四つの口」に代表される窓口を通して、この時代が東アジアに開かれていたことを示し、日本列島を東アジアに位置づけ、さらには同時代の世界史とのつながりを考えさせようとするものである。

こうした考え方は、1980年代以来、蓄積されてきた歴史学研究の到達点ともいうべき研究成果であって、そのような成果がこのたびのリニューアルされた展示に反映されているといえる。とりわけ「朝鮮との関係」では、『朝鮮人歓待図屏風』と『東萊府使節倭使図』の比較や国書との比較を通して朝鮮王と将軍との関係を、「アイヌとの関係」では、『蝦夷国魚場風俗図巻』『松前屏風』『江指浜鯨漁之図』の読みとりを通して、松前藩とアイヌとの政治的経済的な関係や彼らの生業の場について、「琉球との関係」では『琉球貿易図屏風』によって薩摩藩と琉球、琉球と中国との関係を、「オランダとの関係」および「中国との関係」では、『寛文長崎図屏風』による長崎における中国人、オランダ人との関係の場を、各々手元のタッチパネルとめくり資料を補完させながら、視覚的に行き届いた展示に努めていることがうかがえる。

総じて、「四つの口」という関係の場が、研究成果に基づいた確かな史料で再構成されており、朝鮮、沖縄、アイヌ、中国との関係は、各々具体的な「関係の場」を通して、その関係がもつ歴史的な意味を分かりやすく提示している点は、大いに評価されなければならない。ただ、あえて研究成果と展示に関わって、指摘するとすれば、そのような関係性の理解を前提に、さらに、それぞれの関係がはらんでいる政治性について、何らかの言及（暗示）が必要となってくるのではないかという点である。

たとえば、朝鮮との関係で言えば、通信使に象徴される朝鮮王朝と江戸幕府（将軍）との関係を、長期間にわたる対等で友好的な関係であったことを示すのは大前提であろう。ただ、そのような関係を規定していたのは、朝鮮王朝にとっては北方の女真人あるいはその後の清朝であり、江戸幕府が朝鮮王朝との関係を維持する背景には、対馬藩の思惑や、それとは異なる幕府側の独自の論理があった。「江戸幕府・朝鮮政府・対馬三者の利害と思惑が重なったところに、近世の日朝関係が成立した」（鶴田啓「近世日朝関係のしくみ」）のであり、そのように隠れている背景を意識させなければ、近代に至る日本と朝鮮との劇的な関係の変化に対する理解は困難になるであろう。元来、矛盾の上に築かれた関係の一面の論理だけを強調することは、かつての江戸期の対外関係史が、鎖国論批判を招いたようなことになりかねない。

もちろん、限られた展示空間であり、しかも、まずは前提となる基礎的な解釈を提示しなければならないことを勘案すれば、こうした観点を盛り込むことは、いささか困難な課題かも知れない。しかし、新設が予定されている現代展示室との関連で、植民地朝鮮との関係が対象となってくれば、前近代から近代への移行について重要な課題になってくるであろう。前近代の長く続いた「友好的で対等な外交関係」が近代に至り何故に激変するのか、といった近代の日朝関係の変化を示す展示へと導くためにも、前近代の関係が帯びざるをえなかった政治性への最低限の提示は必要なのではないだろうか。

第3展示室における「研究成果と展示」との関係を知る上で、『第57回歴博フォーラム－総合展示リニューアル（近世）に向けてⅠ－国際社会の中の近世日本』（2006年12月）は、大いに参考になった。展示の全体像と研究成果については、荒野泰典氏の講演「世界の中の近世日本－近世国際関係論の構築に向けて」が委曲を尽くして論じており、展示に至る留意点を知るとともに、改めて展示と研究成果の相互関係に対する認識を深めることができる。

ところで、研究成果と展示について、『計画』は「人文・社会科学と自然科学の幅広い学問分野の協業や最新の研究設備により生みだされる質の高い研究成果」の公開を求めている。荒野氏は、上記の講演の末尾において、この方面の研究領域が学際研究を必要としているが、意識するとしないと関わらず、すでにそのような試みは研究現場で始まっていることにのみ言及している。

そのような学際研究（幅広い学問分野の協業）についての問題点については、谷本晃久氏がフォーラムのコメント（「博物館展示と『アイヌ史』研究」）において、アイヌ

史を博物館展示することの学的意味を掘り下げており、今後のあるべき方向を考えると参考に参考となる。ちなみに、筆者がそこで見出した学問分野をあえて取り出せば、言語学、博物館学、民族学、政治学、比較文化学（表象文化論）、社会学、美術史学、考古学、宗教学、経済学などをあげることができる。谷本氏に従えば、それらを援用することによって19世紀前期のアイヌ社会の地政学的環境を学的に捉え、そのうえで、さらに日本の国立博物館での「歴史」展示のありかたを問わなければならないことになる。容易ならざる課題であるが、第3展示室にとどまらない国立歴史民俗博物館の課題として注目したい。

2. 国際化への対応

国際化への対応については、具体的に、次の二点が基本原則（『計画』）として強調されている。①「国内外の歴史認識が変動することによって、さまざまな軋轢が生じるなかで、歴史認識に対する国家間の相互理解を推進するために、より一層の実証性の高い展示を行う」、②外国人入館者に対しては、我が国の歴史と文化への理解が得られる展示手法を実現する。すなわち、国際化への対応として、①では実証性、②では展示方法が掲げられているのであるが、この2点がかつ独自の課題と、国際化への対応について、述べることにする。

「実証性」は、「博物館型研究統合」を理念に掲げる国立歴史民俗博物館の中核的な位置を占める使命であるが、「国際社会のなかの近世日本」のコーナーは、屏風・絵巻物などの絵画史料を駆使した「四つの口」における関係の場を通した展示が柱となっており、実証研究に裏づけられた全体の構成は説得力をもち、国内のみならず、外国からの観覧者にも共感がえられるものと思う。これは、「都市の時代」「ひとともののがれ」「村から見える『近代』」にも共通しており、近世考古学の成果や膨大な実証研究に基づく模型、複製品、パネル、趣向を凝らした復元の展示は、説得力をもっていると判断する。

このような展示に対して、外国からの観覧者のために、「全ての資料キャプションに英文のタイトルを、大・中テーマパネルには、日本語のほかに英語・中国語・韓国語の解説を、小テーマパネルには、タイトルのみではあるが4ヶ国語」を用いて理解のための便宜に供してはいるが、さらなる努力があつてよいのではないかと思われる。

筆者は、前近代史研究に従事する韓国人研究者約20名と共に、国立歴史民俗博物館関係者の解説を受けながら第3展示室を観覧した経験があるが、その的確な史・資料に基づいて再構成されている展示や、また展示内容に対する実証性や歴史研究の成果がすみやかに展示内容に反映されていることに対する驚きの声を聞いた経験がある。当然のことながら、そのような理解に到達するまでには、歴史研究者による通訳と質疑が介在していたのである。

このような体験をふまえて考えることは、上記のようなパネルだけでは、外国人の観

覧者には決して十分とは言えず、その展示の理解を深めるためには、上記3カ国語については、ヘッドフォンなどによる音声上の解説をも検討して良いのではないかと思う。

というのも、これだけの規模と学術的な裏づけをもった日本歴史の展示が観覧できる機関はほかになく、一般の外国人のみならず、より多くの外国人研究者に理解を広げるためにも必要な措置ではあるまいか。上述したような体験の限りでは、各国の日本史研究者の協力をえれば、技術的にも予算的にも、それほど困難なことではないと思われる。

3. 生涯学習等一般公衆の知的需要への対応

『計画』によれば「一般公衆の多様な知的需要に応えるために、多角的で理解しやすい展示方法を実現する」ことを求めている。リニューアルに際して、各展示には、手すりを設けて、そこにタッチパネルやめくりの解説を置き、それらの活用によって、観覧者と展示との距離を縮める努力がなされている点は、展示を一方的にみせるのではなく、観覧者が主体的に展示に働きかけながら、それぞれの関心に従って展示の理解を深化させていくことができるような工夫として大いに評価できる。

さらに、展示を見るだけではなく、音を聞く（日本序曲）、当時のモノにさわる（俵物）、においを嗅ぐ（干鰯）など、視覚のみならず観覧者の聴覚、触覚、嗅覚にまで訴えかけながら、その時代を感じ取ることができるようにする展示方法の努力として、見逃すことができない点である。

「多様な知的需要に応える」という課題に関わって、筆者は、第3展示室のリニューアル後に、関係者の解説に従って3度、さらに個人的に1度の観覧の経験をもつが、その都度に、以前には気が付かなかった、見落とししてしまった、注目できなかった、理解が至らなかった重要な「発見」を何度となく経験した。とても豊富で、あるいは立場によっては過剰ともとられかねない膨大な展示の情報を、いかにして、知的需要の異なる観覧者の各層に有効に伝えるのかという困難な問題を深く認識する契機になった。

展示室に豊富な情報量が詰め込まれていることは、展示の質を保証するものでもあり、決して悪いことではない。むしろ重要なのは、そうした豊富な情報を受け取る方法の問題であると思う。要するに、観覧する側の問題意識によって、あるいは来るたびに新しい出会いができるような方法が求められているのであろう。

様々な方法がありえるであろうが、たとえば、観覧者の手引きは、何段階かの手引きを作成し（たとえば初級編〔初めて日本の歴史に触れる外国人を含める〕、中級編、上級編など）、留意点などの項目を掲げたり、さらに展示に関わる文献などを示したりすれば、展示を契機とした学習や研究が可能となるのではあるまいか。

おわりに

冒頭で限定したように、本報告は、第3展示室が設けた四つのコーナーの中の「国際社会のなかの近世日本」を主たる対象とした。しかし、3点の評価基準から見たとき、

「都市の時代」「ひとともののがれ」「村から見える『近代』」においても、同様の評価となるのではないかと考えている。

最後に、あえて第3展示室に対する希望をのべれば、展示のどこかに、この時代の国家構造が示される必要があるのではないかという点である。この時代を支えた国家構造（たとえば公儀と禁中について）が見えてこなければ、本報告の他の文脈でも述べたとおり、近世から近代への変革が理解できないであろうし、何よりも歴史の大きな流れを把握することは困難であろう。「政治性」に対する距離の取り方にも関わるのであろうが、もともと歴史学がもっている政治性から全く距離を置くことはできないのではないかと考える。

第3展示室の空間がもつ展示情報の密度は、「博物館型研究統合」の成果を如実に示している。信頼すべき展示を通して「歴史を追体験する」ことの楽しさを、一人でも多くの人々に堪能して欲しいと願うばかりである。

平成21年度外部評価委員会の評価

歴博外部評価委員会

委員長 田 端 泰 子

歴博に設置されている外部評価委員会は、今年度は秋に開催された二種の展示、すなわち企画展示「縄文はいつから!？」とくらしの植物苑特別企画「伝統の古典菊」を見学し、これが歴博の展示としてどうあるべきかについて評価をすることになった。

順序としては旧佐倉城跡を歩き、「くらしの植物苑」で「伝統の古典菊」を見学、その後「縄文はいつから!？」を見た。外部評価委員の特典として、詳しい解説が付けられていたので、主催者の意図や工夫が理解でき、展示を十分に楽しむことができたのは、得難い経験であった。一般の見学者には美しく内容の濃い図録が用意してはいるが、一般の見学者にも、希望者には、例えばテープを流してでも、このような詳しい解説が聞ければ、また質問に即答してもらえる日が設定されていれば、展示内容がより浸透されるのではないかと感じる。

博物館を訪れる人は中・高生、一般の方から専門の研究者まで幅広い。すべての人に満足感を与えられる展示を目指すのは、至難の技である。したがって、展示ごとの重点目標、どこに焦点をあてて展示するか、企画展示ごとに特徴を持たせることが必要となる。今回の展示も上のような意図を設定した内容になっていたことは充分理解できる。しかしその上であえて苦言を呈する部分がなければ、今後の展示に進歩も見られなくなると思われるので、外部評価委員からは手厳しい意見も出されている。それぞれの専門の立場からの苦言は、当事者には励ましの言葉として理解していただきたいと思う。詳しくは各委員の評価書に譲り、共通して指摘されている点をまとめておきたい。

〔1〕企画展示「縄文はいつから!？」

- ①毛皮を着た縄文人の等身大のイラストについては、これが作られた根拠と制作プロセスが解説されている点が良かったと、委員からは一致して高い評価がなされた。
- ②図録についても、内容が充実している上、見やすい構成になっており、保存される図録であると、評価は高かった。
- ③しかし「縄文」の定義がなされておらず、「縄文」「弥生」という日本でしか通用しない時期区分概念が、現在進捗しつつあるアジアの先史時代研究の中で、どのような意味を持つのか、という根本的な疑問も出された。
- ④「縄文はいつから!？」と問題提起しながら、1万5000年前に“誘導”する展示であるとの批判にも真摯に耳を傾けなければならないだろう。
- ⑤一般の人にはわかりにくいという指摘もあり、またそれをどう改善するかについて

も、館内でこの展示に直接関係わない人がチェック機能を果たすべきである、ブロックごとの見出しを考えた方がよい、子ども向けパンフは再考の余地があるなど、さまざまな改善の工夫が指摘されている。私は外部評価委員のこれらの提言に、逆に委員の方々の温い視線を感じたことを表明しておきたいと思う。

〔2〕 暮らしの植物苑特別企画「伝統の古典菊」

菊は日本の花弁の代表であり、また古代から日本人の暮らしのなかで年中行事に定位置を占めてきた植物である。今回の展示については、以下のような意見が寄せられた。

①菊についての歴史性は厚いことから、今後もその歴史性を生かした工夫が可能な展示になるだろう。

②縄文の企画展と連動させた植物展示や、暮らしと植物・食物といった観点での連携も考えられるのではないか。

③菊が“人工変形文化”となった根本的理由についての言及が必要である。

いずれの意見も、歴博に「暮らしの植物苑」があり、栽培植物についての企画展示が毎年続けられていることの意味を問うものであり、これらも外部評価委員ならではの貴重な指摘であると感じる。

両企画展示責任者にとっては、意図が十分に理解されていない面があるのではないかと思うが、外部評価委員の意見が、今後の展示企画に対する刺激となれば幸いである。

平成21年度企画展示「縄文はいつから!？」の外部評価

木村茂光

1) 第1の感想は、コンパクトながらよく出来ている企画展示だ、ということである。最近の研究の成果をわかりやすく展示してあり、展示史料も多く、パネルの文章も平易で、苦勞が偲ばれる展示になっていると思った。なかでも、「V 自然科学からのアプローチ」と「VI 列島各地の地域文化」はよくできていると感じた。

「V 自然科学からのアプローチ」は、「炭素14年代法と年代較正」を初めさまざまな年代測定法、自然科学的な分析による考古学へのアプローチが、パネルなどを用いてわかりやすく説明されており、近年の考古学研究の進展と広がりを実感できる内容になっていると思った。

「VI 列島各地の地域文化」は、すでにこの時代に各地域において特徴をもった文化が形成されていたことが、多量な遺物を用いて説明されており、地域文化を具体的に知ることができてよかったと思う。遺跡所在地の現況写真が展示されていたのも、遺跡を身近に感じることができよかった。歴史民俗博物館だけでなく、取り上げられたそれぞれの地域での巡回展示でもできれば、その地域の人たちにとっても有意義であろう。

部分的な評価になるが、「IV 縄文文化の広がり」のなかの「最古のビーナス」の展示は、ビデオやルーペなどを使用し、単なる展示に終わることなく、「これが最古のビーナスだ」ということを、見学者に分かってもらおうとする熱意が感じられ、好感がもてたし、なるほどな、とも感じた。と同時に、常設展においても、理解のポイントとなる資料についてはこのような少々つつこんだ展示方法が試みられても良いように思う。

全体として、繰り返しになるが、非常に積極的な展示だったと思う。

次に、見学して気が付いた点について記しておこう。

第1に、会場が急ごしらえの感じがして、かつ会場も狭く、設営もやや貧弱に感じた。折角の内容なのだから、もう少し費用をかけてゆっくりと見学できる雰囲気をもたせるべきではなかったろうか。

第2に、「1万5千年前になにがおこったのか」というサブタイトルに焦点を当てすぎ、すべての結論をここに持ってこようとしている、悪く言えば誘導しているような感じをもった。従来の研究法のどの部分を見直したり克服することによって、このような年代にたどり着いたのかななどの説明を加えた、もう少し客観性をもたせるような工夫が欲しかったように思う。

このように感じたのは、半島・大陸の遺跡・遺物、すなわち文化との比較が少なかつたこともあるかもしれない。これが第3である。例えば、半島では済州島の高山里遺跡だけだし、大陸では玉蟾岩遺跡だけであった。これだけで「世界最古の土器の一つであ

ることがわかってきた」（企画展示用パンフ）とか、「1万5千年前になにがおこったのか」といわれても納得できない。近年の中国・韓国における考古学的な発掘の成果は著しいのであるから、もう少し「アジアの中の日本列島の土器」という視点があってもよかったのではないか。そうすると、もう少し大陸・半島との共通点や相違点が明確になった上、1万5千年前の変化がどのような規模で起こっており、日本列島の変化がどの辺に位置づくのかも明確になったように思う。会場のスペースの問題があったのかもしれないが、「1万5千年前の変化」という最近の研究成果を生かすためにも残念であった。

しかし、「アジア」に踏み込んだ時新たな問題が生じる。それはこの企画展示が「縄文文化」という列島内ではしか通用しない時代・文化概念を用いているからである。この時代の研究については不案内だが、まだ独自の文化や社会が成熟していない段階において、列島内しか通用しない文化概念を用いるのは、大陸・半島の文化との共通性や相違性を見出しにくくしてしまう危険性があるのではないか、と思うのである。この点は、研究の立脚点の相違もあるのでこれ以上踏み込まないが、率直な疑問として提示しておきたい。

2) 勘違いをして、「くらしの植物苑」ではなく、「佐倉公園マップ」の方の見てしまったので、求められている外部評価とやや違うが、折角なのでこちらの感想も記しておく。

こちらも一周してみて佐倉城の近世から近代を具体的に実感することができて有意義であった。よくありがちな整備されすぎて、近世の城なのか、近世だけ近代の城なのかわからない城郭が多い中で、近代的な手が入っているとはいえ、近世の雰囲気を残したよい公園だと思った。近代になって軍隊に使用されたにも拘わらず、よく近世の雰囲気が残されたものだと感心した。

と同時に、軍隊のトイレや弾薬庫、さらに訓練用12階段の存在は、近世の城が近代になってどのように使用されたのかを生々しく伝えており、歴史を振り返る時のよい教材だと思う。まさに「百聞は一見に如かず」である。

近世と近代がなんとなく混然とした形で残されており、市民にとって親しみある公園になっているように思う。訪れたのが丁度祝日だったせいもあるかと思うが、多くの市民の皆さんが訪れ、ウォーキングをしたり、子ども連れでスポーツをしていたり、犬と散歩をしていること自体がそれをよく示している。

ただ歩いて気になった点を2・3指摘しておく。

公園内にも案内板が設置されていて便利なのだが、歴史民俗博物館で作成した「佐倉公園マップ」の遺跡記号と実際の看板とでは記号がちがっていたのはいかがであろうか。例えば「近代」編では、「マップ」の方は英字だが実際の案内板は数字である、と

いうようである。統一が望まれる。

案内板に加えて、もう少し細かな方向指示板があってもよいのではないか。実際、弾薬庫に入っていく小道が見つけにくかったし（姥ヶ池の方へ降りてしまった）、弾薬庫から姥ヶ池に降りていく道も見つけにくかった。それほど大きなものでなくてよいから（例えば、「弾薬庫→」のような）方向指示板がほしいように思った。私のように初めて歩く者にとっては必要性を感じた。

最後に、これはどうでもよいのかも知れないが、歴博に見学に来られた方が短時間でも「佐倉公園」を楽しめるように、お薦めコースをいくつかつくってはどうか。私は評価をしなければならぬと思って（私の間違いであったが）、外周を含めほぼ1周し本丸に寄り、車道の碑・弾薬庫・階段と回ったが、結構な時間がかかった。そんなことをできない見学者のために、例えば「本丸コース」とか「腰曲輪コース」「佐倉連隊コース」などなど。

II

企画展示・くらしの植物苑

展 示 評 価

2010年3月

企画展示「縄文はいつから!?!」・くらしの植物苑特別企画「伝統の古典菊」の展示について

谷川章雄

1. 企画展示「縄文はいつから!?!—1万5千年前になにがおこったのか—」

この展示は「縄文時代の始まりはいつか」という日本考古学上の大問題についての問いを発し、様々な展示を見せた後にその答えに関わる諸説を紹介して、展示を見た人々に冒頭の問いに対する答えを考えさせるという構成になっている。こうした構成は、展示の筋道を明確にするという意味においては、成功しているといえる。

展示は、旧石器時代から縄文時代にかけての日本列島の「自然環境」、日本および周辺地域の「土器の出現」と日本列島における「縄文文化の広がり」という、自然史と人類史を併記して解説する形をとっており、両者の関係を対比しながら見るができる。

とりわけ、展示されている土器や石器などの考古資料は極めて充実している。当該期の基本的な資料が、これまであまり実見できなかったものも含めて網羅的に集められ、その質と量においては例を見ないものであろう。

旧石器時代から縄文時代にかけての年代や自然環境については、近年の自然科学的分析の進展によって新しい知見が加わり、研究が深化してきた領域である。展示では、たとえば加速器質量分析器による放射性炭素年代測定をはじめとする、自然科学分析の方法に関してわかりやすく説明している。

絵画によって遺跡の景観や縄文人の復元を試みている点も、展示を見た人々に強い印象を与えていると思われる。復元画や模型などはその根拠を明らかにしていくことが重要であるが、その意味で展示図録の中で「復元縄文人はどのように」「風景画はどのように」という、復元画の根拠と製作プロセスを解説しているのは興味深い。展示をする側の意図や展示に至るプロセスを明らかにすることによって、展示を見る人々の関心がさらに喚起されるからである。

この展示は、数多くの土器や石器の資料が並べられているところから、展示を見る人々にとってはやや退屈な印象を与えるものかもしれない。しかし、この展示は言うまでもなく近年の考古学の成果によっており、しかも「先史考古学」という同時代の文献や絵画などの資料が存在しない時代が対象となっているところから、土器や石器などの遺物が展示の中心になるのは当然のことであろう。

また、冒頭で述べたように、「縄文時代の始まりはいつか」という問いを発し、最後に展示を見た人々に答えを考えさせるという構成になっており、それ自体はうまくいっ

ているといえる。

しかしながら、敢えて問題点を指摘すれば、こうした問いと答えに展示の筋道を収斂し過ぎたかもしれない。つまり、旧石器時代から縄文時代に至る人類史と自然史の位相、すなわち人間の活動と自然環境との間にある相互作用体系を描こうとする方向性がもう少し強く意識されていれば、この展示がさらに幅のあるものになったようにも思われるのである。

2. ぐらしの植物苑特別企画「伝統の古典菊」

ぐらしの植物苑では、年間を通じて特別企画として「伝統の桜草」「伝統の朝顔」「伝統の古典菊」「冬の華・サザンカ」という展示が行なわれているが、この「伝統の古典菊」は初冬の花を觀賞するにふさわしい展示であった。

菊が日本を代表する園芸植物であることはよく知られているが、「古典菊」の中に今回展示されているような「嵯峨菊」「伊勢菊」「肥後菊」「江戸菊」「奥州菊」「丁子菊」など様々な種類があり、特色ある花を咲かせてきたことは、この展示によってまさに一目瞭然であった。

また、「嵯峨菊」が京都大覚寺、「伊勢菊」が伊勢松坂、「肥後菊」が肥後、「江戸菊」が江戸、「奥州菊」「丁子菊」が青森というように、それぞれが異なる文化的背景をもっていたこともよくわかった。

今年度の展示のテーマである「育て方と楽しみ方」として、伝統的な花の包み方、菊の栽培書、ぐらしの植物苑での育て方のパネル展示があったことも、菊をめぐる世界の広がりを考えさせるものがあった。

評者は、かつて尾張藩市谷邸の庭園「楽々園」にあった花壇の遺構を発掘した経験があり、そこに栽培されていた植物は文献から明らかにすることができたが、その中にはもちろん「小菊」や「菊花」の名前があった。また、19世紀以降の江戸の花卉園芸文化の発展は、遺跡から出土する植木鉢の増加がそれを物語っている。

今回の「伝統の古典菊」の世界は、公家や武家の文化に始まって一般に普及していったように見えるが、そうした園芸文化の世界は、文献や発掘された遺構・遺物、絵画、民俗など様々な資料からアプローチをすることができるだろう。ぐらしの植物苑の中だけで完結するのではなく、幅と奥行のある研究や展示につながるテーマのひとつになるようにも思われる。

なお、ぐらしの植物苑では「古典菊」などの季節の伝統植物の苗の有償頒布が行なわれているようであるが、上述のような日本の伝統的な園芸文化の普及という点で意義深いものであろう。

3. 二つの展示をめぐる

最後に、これら二つの展示をとりまとめて、若干の感想を述べておきたい。

今回の企画展示「縄文はいつから!？」とくらしの植物苑特別企画「伝統の古典菊」の展示は、前者が旧石器時代から縄文時代の人類史と自然史、後者は古代から中世・近世そして現代につづく花卉園芸文化がテーマとなっていた。これは「先史時代」の人間をとりまく自然環境と「歴史時代」の人間が栽培した植物という相違点はあるが、広くとらえれば、人間と自然との関係の中に含まれるテーマのように思われる。

従来 of 学問の枠組みでは、前者の自然史は植物学や地質学など、後者は園芸学などが対象としており、他方で人類史の研究はこれら自然科学とは別の体系を構築してきたが、そうした個別の領域を越えた、人間と自然との関係をとらえようとする大きな学問的方向の中に、今回の展示のテーマを位置づけることができるのではなかろうか。

いわゆる「環境問題」は現代的課題のひとつであるが、このような人間と自然との関係をとらえようとする方向性は、人類の未来にとって不可欠な歴史的視座を提出することにつながるだろう。今後の歴博の研究や展示に関わる芽のひとつが、今回の二つの展示からうかがえるかもしれないのである。

歴博の展示評価について

田 端 泰 子

「国立歴史民俗博物館」は、毎年、館の総力を挙げて意欲的な展示を行おうと努力している。企画展示においても、常設展示においても、その意図はよく展示にあらわれているが、近年特に館の方針として「博物館型研究統合」が研究・展示の両分野にわたって示されたので、この視点から、展示に現段階の研究成果がどれほど生かされているかを検証してみたいと思う。

(1) 「くらしの植物苑 伝統の古典菊」を見て

「くらしの植物苑」は15年前に開苑され、ここでの展示は歴博での共同研究と組み合わせられるという、「博物館型研究統合」の見本となるスタイルで展示が企画されている。生物学や園芸、民俗学や歴史学を総合する展示で、かつ「くらし」を掲げていることから、一般の熱心な愛好家が注目する展示であるため、人気も高く、そのための難しさもあると思うが、よく考えられた企画展示の内容になっていると思う。

今回のテーマは古典菊である。解説にあるように、中世から嵯峨菊と伊勢菊が栽培されていたことについては、少しは知られていた。しかし、どのような形態で栽培されていたのかについては、一般の人々はもとより、研究者にもそれほど明らかにはなっていなかったのではなかろうか。栽培と鑑賞とそれがどのように記録されてきたか、を一挙に見ることができる素材として、菊は恰好の素材である。

例えば中世には重陽の節句が祝われたが、この日は季節の変わり目であるので、この日を基準に、殿上人・女房の装束は「衣替え」をする慣わしになっていた。女房装束は必ずこの日をもって秋物に替えなければならなかったのである。こうした生活の節目となる日の象徴としても、菊は大切な季節の花であった。

「くらしの植物苑」がこうした現代に生きる文化財としての菊を今回取り上げているのは、歴博ならではの企画であろうと思う。今回、熊本の近世細川藩での菊栽培が明らかにされたのが興味深かった。

菊のこのような歴史性を生かして、菊についての時代別特集を組むこともできるのではないかと感じた。現代の部分では、日本を語った代表的著作といわれる『菊と刀』（ルースベネディクト著）は栽培菊を一つの中心として論じている。したがってこの書についても、今後取り上げてほしいと思っている。

また、企画展示で集められた珍しい栽培品種は、植物苑内に小コーナーを設けて、栽培を続けてもらえれば、後の企画展示への継続性が生まれるのではないかと思う。

縄文の企画展示に合わせて植物苑でも縄文時代の植生と食物としての植物など、関連

する展示または解説があっても、おもしろくなるのではないかと感じた。

(2)「縄文はいつから！？ 1万5千年前になにがおこったのか」を見て

「縄文はいつから！？」には、副題として「1万5千年前になにがおこったのか」が付けられている。テーマ名に疑問符とびっくりマークが付いているように、この企画は驚きを感じる展示であると同時に、見たあとにも疑問がわいてくるというユニークな展示であった。

企画展示で縄文時代を扱うのは、文字資料がなく絵画資料といえるものも土偶以外ないことから、相当な困難を覚悟しなければならない。その点をこの企画では映像と絵画でうまく補い表現している点が特徴的であった。縄文時代の日本人の身長や衣服、持ち物がわかりやすく絵画で表現され、また土器や住居址という遺物・遺跡の研究から、生活の様子が絵画や映像で表現されていたことは、観覧者に縄文時代を身近に考えさせる効果を持っていたと思う。

但し、この毛皮やズボンを見ると、夏の衣類は何だったのだろうかという疑問が次にわいてくる。植物の採集や栽培との関係を今後のテーマとして付け加えてほしいと感じた。

また、研究者・一般向けには、炭素14年代法、熱ルミネッセンス年代測定法、中性子回折法などがていねいに図録で説明されており、日本の各地域の縄文遺跡がわかりやすく図示されているので、研究の現段階を知ることができ、保存しておきたいと思う図録になっている。

総じて今回の「縄文はいつから！？」は、よく出来た、現段階での完成度の高い、また一般の人々にも親しまれやすい展示であったといえる。完成度は高いが、その上に立って、見学した人には次の疑問が数多く浮かんでくる点から、研究統合の面と、それを広く一般に公開するという博物館機能の両面が十分に意識された、興味深い展示であったと評価できる。

企画展示「縄文はいつから!？」および 「くらしの植物苑」の評価

鳥越 皓之

今年度の外部評価は企画展示「縄文はいつから!？」と「くらしの植物苑」の2カ所を評価することになった。

「縄文はいつから!？」は考古学の研究の成果を十分にふまえた充実した展示になっている。そのことはざっと見回しただけでも実感できるほどに迫力のある内容であることが専門外の者でさえも判断できる。関係者の努力を高く評価すべきであろう。

「縄文はいつから!？」というのは、入館者を引きつけるとってもよいタイトルである。この素朴だけれども、誰でも疑問に思うタイトルだし、また最近では、弥生も含めて、その成立期を問うことが、一種の地味な流行となっており、それに呼応していることも、社会的な関心への対応として評価できる。

しかしながら、この展示室に入ると、いきなり土器の説明から入り、「縄文」はいつから?というときの、問いかけた「縄文」の定義(意味)が分からないため、展示物を眺めながらも自分なりの論理の展開を非常にたてにくい。展示企画者は土器の発見が人類史的大発見であることを前提としているが、それが伝わりにくい。つまり、素人目には考えるためのとっかかりが見つからないのである。素朴にやはり土器の表面に縄文装飾が出てくるときかしら、と考えていると無文土器や隆線文土器が並べられていて、そうでもないことが分かった。そこで再度、混乱。このような混乱は考古学者にとってはバックに考古学の学説史、論争史の知識があるため、まったく混乱でないことが、その後に専門家から教えてもらったことで理解できたが、展示物を見る人たちは考古学の素人であるため、混乱のままに展示物を見ることになるのではないだろうか。すなわち、今回の展示は、広い意味の専門家にとってはとってもよい展示であるが、他方、いわゆる一般の人たちには理解しにくい展示であるといえる。

このようなコメントを私は2009年の11月の外部評価委員会の席上で、申し上げたが、そのことに対して、ある外部委員がこの指摘を認めつつも、それは、この展示を担当した人たちの問題(責任)ではなくて、この展示と直接関わっていない館内のしかるべき人がチェックすべきことだったのではないかと発言をされた。そのご発言のとおりだと思う。館内の組織論レベルで考えるべきことだろう。

縄文時代の人たちの絵画がいくつかあり、その表現はどうしても想像が入らざる

を得ない欠点をもつものの、それは具体的にその人たちの暮らしのあり方についての想像を駆り立て、楽しいものであった。皮の服を着用した人間の像も同様である。いままでの裸に近い縄文人についての既存の知識に否定的な刺激を与えているかと思う。本当に革靴を履いていたのというような疑いが起こっても、それはそれでよいように思う。また弓矢の発明やその技術、使い方なども興味深いものであった。

1500 年前の複数要因の複合したものの変化が縄文文化の本格的な始まりであり、土器がやはり決定的な意味を持ち、さらに諸説があることが、展示の最後の方で示されるが、その結論の場所が目立たなくて、“派手なこたえ空間”でないのが、少しばかり惜しまれた。

「グリーンランド氷床コアから復元された気候変動」が縄文時代と比定され、縄文時代の解釈を変えようとしている。しかし、そもそもこの気候変動のパターンそのものがいくつかの仮説のもとに成立している不安定なものであることにもう少し自覚的であるほうがよいかもしれない。最近の GISS（NASA の研究所）にもとづいて地球温暖化についての専門家の議論の中にもそのデータに疑義が出されている。いわんやさらにいくつかの不安定な要因を介在させているグリーンランド氷床コアと日本の縄文時代の気候との比較にはある種の慎重さが必要であろう。

ともあれ、積年の研究成果が活かされて展示されており、博物館型研究統合という当博物館の戦略目標をうまく表している好例と今回の展示を評価できよう。また、近年、考古学的新発見が重なり、縄文文化の位置づけが大きく変わる時期の展示であって社会的関心も高く時宜を得た展示であったと言えよう。

「くらしの植物苑」はたんなる植物園ではなく、本館と関わって人間の生活と植物との関わりを示しているところが特色である。今回はくらしの植物苑特別企画の「伝統の古典菊」を対象とした。その前の 8 月に行われた「伝統の朝顔」も興味深いものであったが、今回の菊もたいへん楽しく、また学ぶことができる特別企画であったと評価できる。菊は目を見張るようなうつくしさがあった。関係者の努力によるこのような相次ぐ興味深い展示が、この植物苑の入苑者数の増加（1995 年の 5694 人から 2008 年の 22006 人）として現れているのではないだろうか。

いわゆる世上で菊について噂されるさまざまな種類の珍しい伝統菊の“すべて”が展示されているということは、先に見た縄文土器の展示の充実ぶりに引けをとらないものと評価できよう。見下ろして鑑賞する嵯峨菊に対して、そのように鑑賞できるように配慮しているなど、いたるところに配慮の跡が見られ、それも好感の持てるものであった。また、切り花の包みの形の説明も興味深い。

そういう中であえて不便を感じたことを述べれば、ハチに名前を書いてあるのだが、それが見えにくく、書いてある札が斜め上にでも向くように配慮してもらえれば、屈んで読まなくてもよいので便利であったように思う。また丁字の意味が分か

らなかった。

菊は江戸時代の文学作品によく登場するのでそれとの関連などがあれば、生活との関連の理解が深まり意義深かったように思う。どうしても嵯峨菊、伊勢菊、肥後菊など、庶民の生活と少し離れた花なので、生活との関連の配慮がもう少しつよければ、この植物苑の本来の目的とも適合し、一層よかったような印象をもった。

難しいことは理解できるが、この特別企画とくらしの植物苑の通常の植物との連関が切れていてそれを残念に思った。季節が冬に向かっているので、多くの植物が枯れており、やむを得ないことがあるのだろうがなんらかの工夫はないものだろうか。

たとえば、食用の菊が植えられているが、この特別展示との関連で、人々の生活を説明するなんらかの手段はなかったものだろうか。

菊とは関係がないが、衣服の原料となる植物や薬となる植物なども枯れているが、それが使われるときの茂った姿や実などが少なくとも絵などで示されていると、菊を見に来たついでに植物苑をそぞろ歩きする入苑者に菊に加えて、くらしの植物というものを考える機会となり、興味深さも増えたのではないかと想像される。単なる枯れ野原では寂しすぎた。

ともあれ、関係者の努力が十分に実っている特別企画であり、レベルの高い観覧会が行われていることも知っている。博物館と連携性をもったよい植物苑であるという印象をもっている。

国立歴史民俗博物館展示評価

馬 場 悠 男

企画展示「縄文はいつから!？」

若い研究者が、最新の研究成果を反映するべく、意欲的に取り組んだ様子が視え、学術的には成功と言える。ただし、「自然科学からのアプローチ」は、学際的な研究指向性はよく分かるが、全体的に現状の説明にとどまっており、主題である「縄文はいつから!？」の回答に向かって収斂していないように見える。これは、個々の自然科学分野の担当者に対して企画意図の説明と協力依頼が不十分であったためと推察される。

日本中の縄文草創期・早期の遺跡から集めた実物資料は圧巻である。特に上黒岩遺跡出土の線刻石偶(ヴィーナス)は、当時の人々の精神性を探る上で貴重であるだけでなく、暮らしを探る上でも重要であろう。なぜなら、腰蓑と思われる線刻があり、日本で最古の衣服を推測する根拠となる資料と言える。具体的な応用例として、私が国立科学博物館で旧石器時代の港川人女性の生体復元を行った際には、春成秀爾教授の指導のもとに、このヴィーナスを参考にして腰蓑を着けさせたことがある。

植生環境、生活状況、衣服装備、縄文人生体復元など、実物とイラストを活用して説明しているのは非常によい。さらに、イラストの作り方の舞台裏や根拠を説明しているのは、他にほとんど例を見ず、来館者にとって極めて興味深いと思われる。

残念ながら、全体に、一般来館者にとっては、わかりやすい展示とは言えない。入口前の広いスペースを活用して、オリエンテーションを上手く行うべきだろう。企画意図などの具体的な説明がわかりやすく提示される必要がある。入口左わきの年表は、問題点を整理してあり、小さなイラストを多用して良くできているので、その重要さとおもしろさを容易に分らせるようなガイドを追加するよう工夫するべきだろう。

せっかく「縄文はいつから!？」という問題を設定しているのだから、それが展示の中でどのように明らかになるか、説明の道程を最初に示すとよいだろう。途中にも、どのような観点からどこまで分かったから、次に進むというような案内があればなおさら良いだろう。展示ブロックごとに大見出しなどの工夫をする。

今回、最初は自分たちだけで見たところ、ある程度は予備知識のある私たちでも十分に

理解できないことが多かった。ところが、展示担当者の説明を聞いたところよく理解でき、そのギャップが非常に大きいことに驚いた。展示担当者のせっかくの深い思いが、展示だけではいかに伝わってこないかを実感した。一般人なら、さらに違いが大きいと思う。是非とも、それを埋める努力をするべきである。

展示をわかりやすくするためには、展示担当者以外の研究者あるいは一般職員が、気を配って補助する必要がある。展示業者のデザイナーを活用するのも有効である。さらに、ボランティアでもよいだろう。退職した中学高校の先生に頼むのが良いかもしれない。

入口の順路を示す矢印は小さい。入口にある案内パンフレットは良くできているが、そこにあることに気が付かないようだ。目立たせ、手に取りやすく配置する。子供向きパンフレット「ジョーくんはなにを持っているのかな？ どうやって使ったのかな？」はよいが、なぜジョー（縄）くんなのか、すぐに分かるか疑問。

図録は、充実していて、表現も工夫もされ、なかなかよい。

ポスターは印刷物の配布だけでなく、電子データを配信すると、さらに広汎に配信できるのではないか。

イラストを描いた石井礼子は、偶然にも佐倉市に在住のイラストレーターである。実は、1996年に私たちが国立科学博物館で行った「ピテカントロプス展」が契機となって、古代人や生活環境の復元イラストを描けるように彼女をトレーニングした。その後、国立歴史民俗博物館の担当者が展示の際に何度も彼女を採用して、さらにトレーニングを行い、大きく育ててくれた。

一般論として、古代人の生体復元や生活状況のイラストは、学術の成果を社会へ還元するために重要なだけでなく、専門家間で共通イメージを持って議論するためにも重要である。そのためには、研究者の意図を理解してイラストを描ける、あるいは古代人の生体を復元できる芸術家を養成することが必要であり、今回はその目的がかなり達成され、結果が十分に反映されていると言えよう。

くらしの植物苑 「伝統の古典菊」

野菊は可愛い。あどけない子供の顔がたくさん並んでいるようだ。それに比べ、肥大させられ捻じ曲げられた観賞用の菊は惨めに見える。瑞々しさ、初々しさが無い。だから日持ちがするのだろうが、なおさら作り物のように見える。

私の感性に照らすなら、大きく醜悪な姿を誇示しているような品種、あるいは、よれよれの老残を曝しているように見える品種が、なぜ美しいのか分からない。花びらの形や大きさ、あるいは質感を変化させられただけでなく、花の数や位置まで制御され、生きる自由を奪われている。野原で気ままに咲いていたときの姿を夢見て泣いているにちがいない。

サクラソウやサザンカあるいはアサガオなら、花の形は多少とも改良されたり、色も変わったりしているが、人間の狂った審美眼の犠牲になっているとは思われない。自然状態でも起こりうる変異の幅を人間が常識の範囲内で広げている印象である。

このような感覚は、金魚の品種でも同じだ。シュブンキンまでは許せるが、リュウキンやランチュウは惨めで許せない。ましてデメキンやチョウテンガンなんぞは狂気の沙汰だ。人間を同じ状態にして鑑賞することを想像したら、耐えられないだろう。私は箱庭的盆栽的な、あるいは奇形好みに近い人工変形文化はどうしても好きになれない。

しかし、このような個人的感情を別にするなら、さまざまな古典菊を集めた展示は、それが好きな人々にとっては魅力的だろう。長い間に渡って育成の努力をしてきた関係者の苦勞に感謝したい。なお、菊の栽培に歴史的意義のあることは理解できるが、私自身の趣味に合わないので、申し訳ないが関心を持ってない。

一方、生物学的には興味があり、色々と質問したところ、担当者が丁寧に教えてくれ、新品種の創出や育成に当たって、栽培種としてのアサガオとキクの生物学的違いが分かり、非常に興味深かった。私の勘違いもあるかも知れないが、キクは挿し芽からのクローンなので特徴が安定していること、また、どのような品種にもさまざまな色があるとのこと。アサガオは実生なので、突然変異が頻繁に顕在化すること、また、品種と色が強く関連するとのこと等々。これらに関して、アサガオと同様な生物学的説明があればよいだろう。千葉中央博物館の専門家と協力して、パネルでなくとも、説明資料パンフレットとして得られるようにならないか。

簡単でも良いから図録を作れば、愛好家には喜ばれるだろう。もっとも、そのような図鑑はたくさん市販されているので、売れないかもしれない。

この「伝統の古典菊」の評価は、私の個人的感性によって歪められていることは承知しているので、そのつもりで受け取って頂きたい。ただし、このような感じ方をする人もいることをご理解いただきたい。

企画展示及び「くらしの植物苑」についての評価書

- I. 企画展示「縄文時代はいつから!?—1万5千年前になにがおこったのか」
- II. 「くらしの植物苑」

李 成 市

I. 企画展示「縄文時代はいつから!?—1万5千年前になにがおこったのか」は、考古学的発見と年代測定などの研究の進展によって、学界における縄文文化の位置づけが大きく変わっていることを伝えるのがこのたびの展示の眼目であろう。北海道地方から南九州地方まで日本列島のほぼ主要な遺跡出土の遺物を網羅し、さらに韓国最古の土器が発見された済州島高山遺跡の遺物を加えた展示は、専門家にとっても貴重な機会となったと推察する。また土器の系統、石器の組成や形態変化、最新の年代測定や土器付着物による食性分析、自然遺物やその化学分析による動植物相との関わりなどが資料やパネルで立体的にあとづけられており、最新の高度な学術成果が十分に展示に発揮され、所期の目的がはたされていると感じられた。

縄文初期の遺物や学術的情報だけの展示では、専門家でない一般の観覧者には近づきがたいが、「復元縄文人」をシンボルとして掲げたことは、大きな助けとなったのではないだろうか。会場で配布されているパンフレットには、衣服や装備について可能な限りの根拠を示しながら馴染みやすい解説を付しており、会場の入り口付近に置かれた人物像と衣服、装備は目を引いた。

さらに「大平山元I遺跡の復元図」や「前田耕地遺跡の復元図」もまた、研究成果を最大限にイラストに反映させようとする決め細やかな努力がみてとれ、想像力を働かせにくい同時期の生活環境を示すのに大いに役立ったと思われる。

ところで、本展示の問題設定である「縄文はいつからか」は、科学的な測定結果を根拠に土器の使用が一万五千年前に遡り、それが氷期の終わりではなく、氷期のただ中で起こったことの意味を問いながら、農耕の起源と無関係に土器が生み出されたことの意味を強調している。この点は、きわめて興味深い認識であり、あらためて西アジアとの差異（焼成された土製品は作られながら九千年前から土器が使用されたといわれている）が注目される。しかしながら、展示や図録では、「世界で最も古い土器」が日本列島から出土したことが強調されるあまり、縄文時代が古くに遡ることに特別な意味があるかのような印象を与えたのではないだろうか。

もしもロシアのアムール川流域のグロマトゥハ遺跡や、韓国済州島の高山里遺跡の土器が同様の頃（一万五千年前）と考えられているならば、「日本だけが古いと言うより、東アジア全体で古い時期に土器が生まれたとみるべきではないか」という指摘があるように（宮代栄一「日本の土器、世界最古なの？」朝日新聞 10月3日）、古い土器が見い

だせる地域の環境との関係が土器の発生にとって、より重要な意味を持ってくるのではないかとの素人なりの疑問がわいてくる。科学的な測定結果によっても、「世界で最も古い」というタームは、常に科学を重んじる近代国家が愛好してきた言葉だけに、それが持っている意味を別な角度から吟味するなどして、そのような表現には慎重であるべきではないだろうか。そうした意味で、宮代氏の記事は、「最古の土器」を相対化しようとする立場からの提言とみることができる。

また、図録（『企画展示 縄文はいつから！？』6頁）には、

何をもって縄文土器とするのか考えてみる必要がある。旧石器時代の石器文化の集団が手にした土器がすぐさま縄文土器と呼ぶべきものではない可能性があるからだ。列島の隅々に広がり、地域の顔となる縄文土器の初現は、最初の土器の出現とイコールなのだろうか。

との指摘がある。実際に最古の土器は「無文土器」であり、その後に見えるのが「隆線土器」であるとすれば、上記の問いは、きわめて意味深長な問いとならざるをえない。「縄文時代はいつからか」と問いながら、縄文土器ではないものの起源を、縄文土器の起源とみなし、それを前提としているからこそ、エピローグで掲げられているような時代区分論が成り立ちうるのではないだろうか。全くの素人の誤解があるかもしれぬが、論理的に考えれば、上記の通りである。

最後に、あえて言えば、「縄文はいつからか」という問いは、あまりに日本国民だけを対象にした問いではないだろうかという疑問である。「縄文」「弥生」は先史時代についての時代区分として長く用いられてきており、それをを用いるだけの学術的な根拠があると信じるが、東アジア諸地域の土器の発生や、それにとまなう新たな変化の指標（狩猟道具の出現、定住への傾向、精神生活の表象）などの対比のなかで、人類史に位置づけようとするときに、この地域の新たな歴史像の変化として提起することも可能だったのではないだろうか。歴博が日本列島の歴史や文化を東アジア地域との関係の中で追究することを大きな主題として取り組んでいるがゆえに、あえて誤解を恐れず述べておきたい。

II. 「くらしの植物苑」

これまで長く歴史民俗博物館を利用しながらも、「くらしの植物苑」の存在および、そこにおいては日本列島の民俗に生き続ける多様な植物を育て、その姿かたち、生きざまを文化財として展示していることをうかつにも知らなかった。食べるための植物、薬としての植物、道具や建物などの材料となる植物、観ることや香りに触れることで安らぎをもたらす植物など、多くの樹木が観覧できるばかりでなく、いくつかのゾーンに分けられて育てられている植物は、これらは苑内のゾーニングを記した詳細な平面図が用意され、遊歩道にそって苑内の植生を理解する助けになっており、季節ごとに苑内の空間を楽しむことができる。

特別企画「季節の伝統植物」には1998年より、園芸品種（サクラソウ、アサガオ、キク、サザンカ）によって年4回開催されているとのことであるが、「伝統の古典菊」を関係者の懇切な解説と共に鑑賞する機会をもった（11月13日）。それによって、当日は江戸時代以来の古典菊の地域的特色や、その観賞や改良の歴史的背景に関する豊富な知見がえられ、近世・近代の生活史のなかの古典菊に思いを馳せることができた。展示には様々な工夫がこらされており、たとえば、鑑賞に関する歴史的な考証から、古典菊をどのような位置から鑑賞していたのか、当時の視線に合わせて鑑賞の位置（舞台）を設定するなど、このような細部のところまでこだわって展示がなされており、歴史民俗博物館ならではの展示と感心させられた。

『歴博のめざすもの』には、「歴史民俗博物館における研究の視野は、自然との関係性も含めた人間の営みのすべてにおよぶ」と唱われているが、「くらしの植物苑」で毎月開催される「くらしの植物苑観察会」もまた、高度な研究成果を背景に、植物と人間の営みを観覧者に提供する活動として注目されてよいのではないだろうか。

たとえば第123回青山宏夫「樹をみて絵図を読む」は「近江国葛川絵図」（文保年間1317-19年）を用いて、絵図に描かれた樹木の表現に注目しながら、製作された当時のこの地域における相論のあり方を読み解くというものであるが、植物と人間との関わりを資料に即して読み解く試みであり、「くらしの植物苑」における活動もまた歴博がめざす「博物館型研究統合」として有機的な関係を示すよい事例と思われる。

さらに「くらしの植物苑」特別企画として刊行された『冬の華 サザンカ』（2009年11月）は、「くらしの植物苑」のあり方が凝縮されているような図録となっており、各品種の写真と説明からなる「園芸品種の分類と品種群」、箱田直紀「サザンカの品種発達に関する史的考察」、大場秀章「江戸時代に来日したヨーロッパ人とサザンカ」、篠原徹「サザンカ小考」の諸論考はサザンカをとおして、植物と人間の営みの密接な関係を具体的な資料に即して明らかにしている。美しいカラー写真によるサザンカの多様な品種の紹介（「園芸品種の分類と品種群」）は諸論考の助けとなり、両者が相まって優れた構成になっている。今後も、博物館本館と「くらしの植物苑」と連携させて一体化させて活用することによって、立地条件を十分に生かした歴博の活動を希望したい。

.....

国立歴史民俗博物館外部評価報告書
～歴博の展示について～

平成22年3月31日発行

編集 国立歴史民俗博物館評価委員会

発行 国立歴史民俗博物館

千葉県佐倉市城内町1-1-7番地

印刷 株式会社太陽堂印刷所